
子供の足音

新許曳舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供の足音

【Nコード】

N6624H

【作者名】

新許曳舟

【あらすじ】

学生時代の友達から「妙な足音が聞こえるようになった」と相談を受けた数日後、彼女が謎の失踪を遂げる。足音が原因なのか、それとも他の原因なのか。不気味に思いながらも日常生活を続けていたある夜、私の家にも足音が響いた……

「ねえ、マユミ、幽霊って………信じる？」

私が喫茶店の席に着いたとたん、学生時代からの友達は奇妙なことを口走った。顔が青く、以前に比べて心持ちかやつれてしまったようにも見える。髪の毛も所々のほつれが目立つ。

「はあ？幽霊？信じるわけ無いじゃん」

そう答えて、私は水を持ってきたウエイトレスにケーキセットを注文した。サキは

「じゃあ私も」とケーキを追加注文する。見た目は多少やつれてはいても、さすがサキ、食欲だけは変わらないようだった。

「もうつわりは平気なの？」

ウエイトレスが去った後、私は首をかしげてサキを見た。この前会ったときは、何も食べられなくて死ぬ死ぬと騒いでいたのに。

「うん、おかげさまで」

サキは笑って大きく膨らんだ腹を撫でた。ケーキでも焼いているのか、店内に甘い香りが充満している。

「最近ね、私が笑うと一緒に動くようになったの。かわいいでしょ。胎教で音楽とかも聞かせてるんだけど、将来……」

「で、幽霊って？」

私はサキの話を遮って言った。どちらかと言うと気になるのはそちらのほうだ。大体、顔も見えないのにかわいいも何も無いだろうが。

幽霊、そう幽霊なんだけど、とサキはとたんに真剣な顔になった。

「最近ね、家の中を夜になると歩き回る足音がするの」

「聞き間違いじゃなくて？」

サキに一番ありそうなことだ。違うんだってば、とサキは頬を膨らませ、いいから聞いてよ、と話し始めた。

サキの話 요약すると、大体次のようだった。

事の起こりはちょうど妊娠したころ、だから10ヶ月ほど前のことだった。足音は、最初は家の外から始まった。ある朝、茶色く泥で汚れた足跡が二件先の道路に沢山付いていたのだ。ちょうど大きさは子供くらいで、指の跡がはつきり残っていることから素足だろうと思われた。だから最初は、サキも気にしていなかった。どこかの子供が遊んだ跡なのだろう、と。

しかし、その足跡が毎日続き、それどころかだんだん家に近づいていることに気づき、サキは不気味に思った。それでもこの段階では、子供が遊んでいるだけだ、気にしすぎだろうと思っ対策は取っていないかったのだ。

しかしその後、足音は突如家の中を歩き始めた。最初は玄関を、次に廊下を、素足の音を立てて歩き回るようになったのだ。サキが怖くなって寝ていた夫を起こし、見に行ってもらったが、その時には足音はもう収まっていたせいだ、

「何も無い」と言われて取り合ってもらえなかった。しかし、翌朝起きてみると、床といわず壁といわず、びっしりと茶色い跡が付いていた。

やがて、ついに足音は寝室内を歩き回るようになった。ぱたぱたと一晩中すぐ近くで響く足音にサキは怖くて一睡も出来なかったが、隣で夫はぐうぐう寝こけていたそうだった。

しかし、さすがの夫も朝起きてみて自分たちの寝室に汚れた足跡が大量についていたのには驚いたようで、その日のうちにお札をもらってきて寝室の四隅に張っておいた。

そのおかげか、そのあとぶつりと足音は無くなった。

「ならよかつたじゃない。お札なんて胡散臭いけど。」
と私が言うと、

「だから！人の話は！最後まで！聞いてよ！」とサキはテーブルを叩いた。話している最中に届けられた紅茶のカップが、白いレース

のクロス上で揺れる。

「最近また来るようになったんだったら！」

「ふーん」

そう言っただけ私はシフォンケーキを口に運んだ。もちろんクリームをたっぷりつけてだ。

「な、何でそんなにどうでもよさそうなの！？人が真剣に話してるのに！」

だってどうでもいいし、とは言えない。

「前回何事も無かったんならさ、今回だって平気なんじゃない？」

「そ、そりゃそうかもしれないけどさー、でも、何かあつてからじゃ遅いじゃん！」

「まあそうね」

冷めてきた紅茶で口の中の甘さを流す。ちよつと渋い。

「夫はその足音を聞いているの？」

私が訪ねると、サキは首を横に振った。

「気のせいだろう、って。出産前だから不安なんだろうとか言ってるの」

だから違うのに、とショートケーキのイチゴをフォークの先端でつつく。

「でもお札貼ってるんでしょ？だったら平気なんじゃないの？」

まあそんなものに本当に効力があるなんて私は信じないけど、というか足音の存在から信じてないけど、と思いつつ言うと、サキは困ったような顔になった。

「うー…そりゃ貼ったけどさあ……やっぱり心配じゃん！」

気分は分からないでもない。確かに心配だろう。

「この前だってさあ、女性の死体が家のすぐ近くで発見されたんだよ？もう引越そうかな……」

「いやいや、まだ家建てたばかりかでしょうが」

「そうだけど、これ以上あの家に住みたくないよー」

「さあ、と紅茶をすすするサキ。砂糖壺を手にとって、すっかり冷

め切った紅茶に山盛り3杯の砂糖を放り込む。入れすぎなんじゃないかと思っただが、やはり私の知ったことではない。

「でもあれじゃないの、無闇にその足音が有害だって決め付けることも無いんじゃない？単に歩いてるだけかもよ？」

「まあ、そういうこともある、かも、しれないけど……」

ざりざりとカップの中をかき回し、サキは釈然としない顔をしつつも、それでも私の意見に頷いた。

「心配しすぎだつて。大丈夫よ」

「そうかなあ」

サキは何かを思い出すように斜め上を見る。釣られて私も見たが、ただ大きなファンがくるくると回っているだけだ。

「そうよ、きつとそう」

私は笑って、サキの肩を叩いた。彼女の夫の意見に賛成だ。きつとサキは疲れているんだろう。だからこうしてたまには休んだらいい。そう思っただけ、私は話題を変えることにした。

「ねえ、子供の名前つてもう決めたの？」

「ん？」

サキはふと顔をこちらに戻した。唇の端にスポンジの欠片がくっついている。

「えーつとね、んーとね、まだ男の子か女の子かも聞いてないし、いろいろ考え中なんだけど、ナイトとか、エルフとか、どうかなーって思ってる」

「は？」

思わずまじまじとサキの顔を見てしまった。正気か？

「だからあ、えるふとか、ないとか、あとはー、ごっどとか？」

楽しそうに指折り数えるサキ。

「それは止めたほうがいいと思うよ。止めなさい今すぐ」

「ええ？なんでよー？可愛いじゃん」

「どこが？……あんた馬鹿？」

いや馬鹿なのは昔から知っていたけれども。でもここまでとは思

っ
てい
な
か
つ
た
ん
だ。

「馬鹿じゃないよお」

その後私たちは他愛無いおしゃべりをして、それから別れた。

サキが失踪したのはそれから10日も経たないうちだった。

夜中に突然産気づいたサキを、病院へ連れて行くこととしたときだったという。

普通なら動くのだって大変なはずなのに。彼女の夫が車庫に行つて、車を出すだけの、たったその間に、サキは忽然と消えてしまったのだ。

そしてサキのいなくなったあとには、いくつもの小さな足跡が付いていたそうだ。

けれども私は、彼女の失踪とその

「足音」の話に、いくらかの不気味さを覚えつつもすっかり忘れ去ってしまったっていたのだ。サキがあまりに足跡足跡というから、彼女の夫も絨毯の染みか何かを見間違えてしまったのだろう。

幽霊もオカルトも超常現象も、私は一切信じてなかったし、それに、自分に関係のある話だとも思っていなかった。

そして多分、彼女がいなくなつてから2ヶ月ほどたった頃のことだ。

「……ん？」

いつものようにアパートを出て、いつものように会社に向かった私は、二件先の曲がり角で、奇妙な跡を発見した。

黒い跡が、道一面にぺたぺたと広がっている。

「なんだろ、これ？」

畑仕事を終えたばかりのトラクターが運行した跡のようだが、土くねで茶色いわけではなさそうだ。どちらかと言うと水の跡に似ている。コンバインだろうか？

「んー……」

頭のどこかで何か引つかかるような気がしたが、特に深く考えもせず私は会社へと向かった。きつとどこかの家が洗車でもした跡なのだろう。

次の日も私は同じ道を、いつものように通った。いつものように角を曲がると、昨日と同じように、だが昨日より少しこちら寄りに、また同じようにタイヤの跡のようなものが沢山付いていた。

「今日もか」

そう私は呟いて、しかしもう今日はなぜそのようなことが起こるのか考えもせずに先へと進む。アスファルトの表面にあった小石が靴に当たって跳ね、私は何気なくその方向を目で追う。

小石は前のおじいさんの家のリュウノヒゲの上を跳び越し、その向こうにあつた物体にぶつかって落ちた。はて、と私はまた首を傾げた。昨日まであんなところにあんなのは生えていただろうか？そもそも通勤中に人の庭など見たことが無いから分からないが……

少しだけ興味がわいて、無作法だと思いつつもおじいさんの家の生垣の下に首を突っ込む。

はたしてあれは、

サキと目が合った。

「え、あ……………」

あとずさろうとして、数歩も進めずにへたり込んだ。

まさしくサキが、首から上だけになったサキが、こちらを見つめていた。

死の瞬間に何があったのか、激しく顔が歪んで、苦悶の表情を浮かべてこちらを睨み付けている。

あれだけ綺麗だった髪がヤマアラシのようになっていて、あれだけよくしゃべっていた口からは血が垂れていて、あれだけ輝いていた目はもう濁っていて、

どこかで誰かが叫んでいる。

自分だ、ということに気づくのに随分とかった。

私は警察で、さまざまなことを聞かれた…… ような、記憶がある。正直言っ てよく覚えていない。

それまではほとんど心配なんてしていなかったのに、サキがあんな形で見つかったことがショックで、ただ泣いていた。

彼女が帰ってくると自分は信じていたのだと、今更ながら思い知らされた。

まさか死んでしまうなんて思っ てなかったのだ。いつか笑いながらひよっこりと帰っ てくると信じていたから、そうしたら怒っ てやろうと思っ ていたから、だから心配なんてしていなかった。

婦警さんに忍耐強く慰められて、犯人を捕まえるために全力を尽くすと言われて、そして結局、ほとんど何も手がかりになるようなことは言えずに私は家に帰っ てきた。

もちろん仕事は休みだ。

結局その付近から、ばらばらになったサキの体はすべて発見されたそうだ。

しかしいなくなっ たときにお腹の中にいたはずの赤ちゃんは、どこにもいなかったという。

その夜ベッドに入った私は、電気をつけたまま寝返りを繰り返してばかりいた。目を閉じるとサキの顔が頭にちらついて寝るどころではない。

こんな時、誰かがいてくれたらいいのに。

そう思うと、はたと警察署ですれ違ったサキの夫のことが思い出された。

彼はもちろん、私以上にショックだったようで、半狂乱で叫ぶ姿はそのときの私にすら怖かった。

新聞がポストに配達される音と、その新聞を運ぶバイクの音が断続的に聞こえる。朝になったな、と寝返りを打って、

ひた、と。

「……………！」

不意に聞こえた音に、体中の毛が逆立った。

私は一人暮らした、自分以外の誰かが夜中に家の中など歩くはずが無い。しかし聞き間違えようもなく何かひたひたと部屋の周りを歩き回っている。いや水滴の落ちる音だろう、確かめに行かねばと思ったが、恐怖で体が動かない。

そうだ……………これだ。

どうして忘れていたんだろう。

サキが言ってたじゃないか。

「足音がした」って。

あんなの、単なる聞き間違えじゃないの？

でも……………確かに、今、足音がしている。

まさか。

ど……………ど……………。

どうしよう。

ただそれだけが頭の中をぐるぐると回る。

声が出せない。電気をつけて見てみればきつと大した事はないの
だろう、そう思ってもどうにも出来ない。

私が息を潜めて体を固くしていると、足音はしばらく部屋の周りを
歩き回った後、どこかへと消えて行った。

それでもうとうとと眠ったようで、ちちちと鳴く鳥の声と、爽やかな
朝の光で目が覚めた。

「あれ……」

昨晚の事は夢だったのだろうか。サキの事を考えていたから、夢
にまで出てきてしまったに違いなかった。気味の悪い夢だ。

ゆっくりと、布団の中で、安全であることを確かめるように伸び
をする。

会社に行く気には、なれなかった。しかしだからといって、この
部屋でいつまでも布団に包まれているわけには行かない。気持ち
奮い立たせて起き上がり、パジャマをのろのろと脱いでゆく。

それでも行かなくちゃいけない。

ただ休むわけには行かないという義務感から、服を着替えてゆく。いつもの倍以上時間をかけて着替えた後、大きく息を吐いて私は寝室の扉に手をかけた。

ゆっくりと、開ける。

すると、

壁といわず床といわず、一面に赤黒い小さな足跡が付いていたのだ。つた。

その日の夜、私は電気をつけたままりビングで布団に包まっていた。た。

夜が来るのが怖かった。仕事は何一つ手につかず、それでも昨日の出来事は社内に知れているのか、誰も彼もが私を遠巻きに見て囁きあうだけで、叱ろうとも励まそうともしなかった。

昨日の足音が、決して単なる聞き間違いや空耳の類ではない事が、廊下の足跡が示していた。脳裏にサキの顔がちらつく。サキはあれを土の足跡といていたが、よくよく見ると土でも何でもなく、血がべたりと足形についているのだった。

彼女はどんな風に笑っていただろうか。

彼女はどんな風に喋っていただろうか。
思い出せない。

すべてのサキの記憶があの手だけに塗り替えられてしまっていた。出来事として思い出せても、実感も伴わなかったしその時の映像も思い出せない。全てがサキ以外の人のことのように薄ぼんやりとして結びつかない。

私も、彼女のようになってしまうのだろうか？

こんなに怖いんだったら、他人の家に泊まらせてもらえばよかったと思うが、そんな事を頼めるような人はいなかった。

ただ、私は布団を頭まで被って、昨日と同じ明るい光の中で丸まっていた。自分でも何をそんなに怯えているのか分からない。理由なんて分からない。ただ怖かった。

サキを信じなくて済まなかったと思った。

あの時は本当にそう思ったのだ。幽霊なんてないし、足跡なんて単なる見間違いだらうと。それに他人事だった。

どれくらい経った頃だろうか。

昨日と同じ時刻だとすると新聞の配達された頃だと思うのだが、そのような音は聞いた覚えが無い。

不意に、廊下で、小さな足音がした。

ぱたり、ぱたり、と近寄ってくる。

お願い、来ないで……

布団を掴んで必死に念じるが、昨日と違ってこちらに一直線に向かってくるようだった。

お願い、お願い……

ぱた、ぱた……

どうして私に寄って来るの？何がしたいの？

足音の主に言ってやりたい事は沢山あったが、口が動かない。ガタガタと震える体が抑えられない。

足音がリビングに入ってきた。出ていけと思っても、自分のほうへと近づいてくる。ゆっくりと、だが確実に私の横に立った。じわり、と股間から漏れた液体が、私の体と下の絨毯を濡らす。

あたりはしん、としている。

足音の主はいなくなったのだろうか？しかしもし布団の外を見て、まだそれがいた場合にはどうすればいいのだろうか。それとも本当に足跡の主なんて私たちに見えるようなもののだろうか。濡れた部分が、徐々に熱を失って冷たくなってゆく。

あたりはしん、としている。

あとどれくらい待てば朝になるのだろうか？明日の夜は、絶対に誰か別の人の家に泊まる。もうこんな家になんて帰らない。何でわたしがこんな思いをしなきゃいけないの？全部サキのせいじゃない。あの子はいったい何をしたって言うの？私があの子を信じなかったのがいけないの？だって仕方ないじゃない、幽霊も心霊現象も無いと思ってたんだから。

あたりはしん、としている。

……ねえ、音がしないって事は…消えたの？何で私にまとわりつくの？この足音を立てるのは何なの？
もう来ないですよ！何でなの！？

あたりはしん、としている。

……消え、た……？

今晚はこれで終わりだろうか。だとしたら私は明日からどこか、ここでなければどこでもいい、とにかく出来るだけ遠くに行こう。もうこんな目にあわなくて済むように。

そう思って、布団から出ようとした瞬間、

びた、と音がした。

「……………」

私の足に、何かが触れた。足先を撫で、徐々に太ももへと上がってくる。酷く冷たく、小さな手だ。

ざわりと体中の毛が逆立って、冷や汗が噴出した。服を着ているというのに、布団を被っているというのに、体に直接接触せられる感触がする。視線を下に向けられず、ただ目の前の布団の裏地を見つめる。

何？何が私を

手が触れるたびに体の熱が奪われ、凍えそうに寒い。まるで愛撫でもするかのように、その小さな手は私の体を撫で回した。

太ももの付け根を撫で、尻を、胸を……体中を。冷や汗が凍りつくようだ。

そして、下腹部を撫でた手が、私の秘部に触れた。

やめて……………！

口を開けたが、声は出なかった。

誰にも触られたことが無かったのに。
何で、私が、こんな目にあわなきゃいけないの………？

私もサキみたいになるの？

秘部を押し広げられ、つぶり、と、体内に何かが入ってきた。

刺すような冷たさに、私はただ息を呑んで目を閉じて、涙を浮かべることしか出来ない。

早くこれが終わって、足跡の主がいなくなってしまうこと、それだけを祈る。

これは……指、じゃない。

ただ、直感的に思った。

そうじゃなくて

私の意識は、そこで途切れる。

サキが妊娠していたことと、そのことについての関連に気づくのが遅すぎたのだ。

怖かった私は、何事も無かったように、勤めて日常を過ごしていた。そしてそれっきり、無理やりに友人宅に泊り込んだせいか、謎の足音も出てこなかったのだ。

だから、もう、平気だと思っていた。

もう足跡も足音も現れない。サキは不幸な事故だったんだ。

忘れようとしていた。自分に何かがあったと認めるのが怖かった。一時はそれに成功したと思ったのだ。

「怪足音」とサキは、無かったことにされて、私の記憶の隅に無理矢理しまい込まれていた。

そしてそれがいけなかったのだ。

体調が悪いということに気づいても、気にしないように、平気な振りばかりしていた。自分の下腹部が、身間違えようも無いほど膨らんでいるという事実を認めざるを得ない状況になったときには、もう手遅れだった。

男と一緒に寝たことなんて無い。あの夜としか考えられないのだ。怖くて、病院にも行っていない。

今、何ヶ月くらいなのだろうか。忘れてしまおうとしていたせいでよく覚えていないが、今の私の腹部は、スイカと同じくらいの大きさがある。もう臨月の大きさだ。職場では誰の子かと聞かれるが、分からないとしか答えようがないし、ましてや幽霊の子だなど言えるはずもなかった。

時折もぞもぞと動き、私の腹を蹴る。

その度に私は自分の胎内で得体の知れない生物が生きていることを思い知り、吐き気を催すのだ。

自分の胎内にいるのは何なのか？

自分はいつたい何の子を宿してしまったのか？

時折自分で自分の腹に包丁を立て、中身を取り出してしまいたい欲求に駆られるが、自分の命と、もし人の子でなかったときにどうすればいいか、もし人の子だった場合どうすればいいかを考えると、とても手が動かなかった。

そして、またあの足音が来るようになった。

無理矢理押しかけてしまった友人宅に、だ。

きつと元から、家を変えることなんて対策になっていなかったのだろう。1週間ぐらい前からだろうか、夜な夜なやって来ては私の周りに足跡を残して消えてゆく。

最初の3日ぐらいは友人も我慢してくれたのだが、4日目になって「本当に申し訳ないんだけど」と言われて追い出されてしまった。それから行くところもなく、仕方がなくまた自分の家に戻ってきてしまった。

私は椅子に腰を下ろして、はあ、とため息を吐いた。窓の外はもう暗いが、何時だろうか。ここ数週間は引きこもってしまっただこにも出かけていないから、曜日どころか時刻の感覚すらなくなってきた。

「どっしり……」

自分の膨れた腹を見下ろして呟く。このままじゃ、自分もサキのようになるのは分かりきったことだった。そして、それがそろそろなことも。

分かっているのに、何もしなかったのだ。信じたくなかったから。

……馬鹿だ。

「……」

きゅう、と、お腹が締め付けられる感触がした。

「嘘……嫌っ……!!」

お腹を押さえて私は叫んだ。

もぞもぞと胎内で何か動き始めている。

私の中から、出ようとしている。

……何が？

ざあ、と全身の血の気が引いた。

私も……ついに、こうなる日が来たんだ。

どろじゆづ。

誰か、誰か……助けて！

サキ……！

ひた、と、足音が、聞こえた。

玄関から、居間を通って、ぴたぴたと、ゆっくりと、ダイニングにいる私の方へ向かってくる。

ゆっくりと、でも確実に。

そして私はその足音の主を始めて見た……否、見なかった。音はするのに、足跡はついているのに、そこには何も無いのだ。

ただ足音とともに、床に小さな血の跡がつくだけ。私に近づいてくる足跡が、つくだけ。

恐怖のせいかな、小さな足音が、嫌に鮮明に聞こえる。

「やだ、私っ、まだ………！」

まだ死にたくない！

「や、嫌、嫌………！」

サキの顔が目に見えた。

私もあなるの？

ねえ！？

嫌だ、嫌だよ！嫌だよ！

私、何もしてないじゃない！

何がいけないの！？

何をすればよかったの？

椅子を立って逃げようとするが、勝手口のところまで這うのが精一杯だった。

その間も、ぱたぱたと足跡は私に近づいてきている。

「ちよっ………何なのよ！」

あわてて取っ手を握ったが、動かない。

鍵がかかっている。

また一歩、一歩、私の方に赤く血で濡れた足跡が近づく。

「嫌！来ないでよ！」

鍵を開けて引っ張る、まだ取っ手は動かない、
下の鍵！

赤い足跡が私の足のほんの10センチ向こうに付いた。

下の鍵が開いた、あわてて引っ張ると今度は途中で引っかかる、
チエーンが、

ぱたぱたつ、と、鮮血が私の腹の上に落ちて、服を赤く濡らした。

チエーンが外れない、一度ドアを閉めなくちゃ、

「
いっしょに、あそぼうよ」

耳元で、小さな声が、聞こえた。

振り向くと赤く裂けた口だけが見える。

その声に呼応するように私の体から腕が出て足が出てそれから顔が、

出血で薄れ行く意識の中、私は彼らが何で遊ぶかで相談している
声を聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624h/>

子供の足音

2010年10月11日03時56分発行